－所蔵作品紹介－

山口　健智　YAMAGUCHI Kenchi

部屋の片隅

へやのかたすみ

作品データはこちら

かつて、あるテレビ番組に、部屋の中の様子から、その部屋の住人を推理する、というものがあった。「部屋の片隅」と題されたこの作品をみて、同様の興味をそそられる方も多いのではないだろうか。画面に描き込まれたこまごまとしたモティーフは、見ているだけで楽しく、創造力を刺激する。壁に留められた雑多な道具や日用品、外国語の書き付け、署名入りの日本語の手紙、肖像画、ラジエーターの上に置かれたカフェオレボウル…。すでにお気付きかもしれないが、部屋の主は、画家・山口健智その人であり、描かれているのは、彼が長く暮らしたパリのアトリエの壁である。1921年、旭川に生まれた山口は、34歳の時、念願のパリ行きを果たし､61歳で亡くなるまで、そこを拠点として絵を描き続けた。

そうした視点でみると、確かにこの作品は、パリに暮らす日本人画家の生活の一端を、リアルにかいま見せてくれている。だが、不思議とそこに感じられるのは、なまなましい生活感というよりはむしろ、控え目な品の良さである。自分の部屋というきわめて日常的なシーンを題材としていても、どこか洗練された雰囲気を失わないのは、山口健智ならではの持ち味といえるだろう。

それは、彼が長年にわたりルーヴル美術館に通いつめ、ヨーロッパの古典絵画の模写を続けることで培った、油絵の技術に拠るところが大きい。丹念につくり込まれた、つややかできめ細かな絵肌は、容易には真似のできない品格をそなえている。さらに注目したいのは、画面の構成に対するセンスの洒脱さである。温かみのある白い壁には、ひとつひとつのモティーフが、ほどよい色彩のバランスを保ちながらちりばめられ、互いの存在を引き立てあっている。みる人は、描かれたものからものへと視線を移していくうちに、まるで一遍の詩を読み進むかのように、自然とその絵画空間の中に引き込まれることだろう。すでに山口は1960年代から、新聞やマッチ、釘などの日常的なモティーフによって構成した作品を制作しており、〝その組合せから触発される一種の生活詩ともいうべきイメージにふしぎなシュルレアリスチックな幻想がプラスされていて、近代的な新鮮味のあるオリジナリティを感じさせる（註）〟などと評されていた。そのオリジナリティは、たゆまぬ技術研究による格調高く緻密な写実表現に、持ち前の洒脱な構成力と、繊細な詩的感覚が加わることによって生まれたものといえよう。たとえていうなら、まるで現実の世界に半透明のベールを１枚、ふわりとかけたような、淡い幻想味を帯びた独特な味わいをかもし出す絵画世界。それが、山口健智の作品の大きな魅力のひとつではないだろうか。

（註）植村鷹千代「山口健智の人と作品」
『三彩』240号三彩社1969年２月